

昭和二十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十九年四月一日發行
昭和二十九年三月二十五日印刷
昭和二十九年四月一日發行

第二十卷

四月號

淨

土



文

四月號

愛情無限

一杯の茶碗の水。これをこぼせば、それ丈け中の水はへる。ならば、人間の愛情も傾ければそれ丈けへるだろうか。私はそうは思わない。

愛情は無限である。――。

子供への愛。妻への愛。戀人への愛。藝術への愛。學問への愛。神への愛。……愛情の形は無數であり、それを生む愛情は無限である。

而も、人は愛しつゞけ、なお多く愛さんとする。

この愛。無限に盡くることのない愛情の泉。これあることによつて、人間は美しい。人の世は平和である。人と人とが愛し合う。何とうるわしく、尊いことであらう。私はこのような愛の姿を無條件で受け取りたい。

愛する者の愛の無限性。それにもまして、愛される者のつゞしみ深い受入れ方をこそ、私は大切なものと思う。愛は往々にして、獨占欲によつて汚される。黙つて、秘やかに、而も強い反應を以つて愛される。そこに、佛と衆生との關係が成り立つのではあるまいか。

慈眼視衆生

福壽海無量

私の好きな一句である。

(竹中)

淨土四月號目次

落花……………吉田絃二郎(1)

北邊開教(三)……………石上博應(12)

——ビルマの花まつり……………山田隆元(9)

人形劇 花まつり……………森正義(14)

小消息 善人と惡人……………佐藤賢順(4)

放送臺本 花まつり……………高橋良和(22)

釋迦牟尼降誕……………竹中信常(18)

意譯中夜禮讚……………吉田定久(18)

法悅誕生寺より知恩寺へ……………山中昇(27)

釋尊物語(一)……………山崎宏(20)

芝圖だより……………表紙(三)

表紙……………松濤遠文

落花



春は京の旅を思はせる。

戦さのころであつた。わたくしは知恩院の細井照道師に
みちびかれて御門主に謁をたまはつたことがあつた。御門
主は緋の衣を召されてゐたが、非常にけだかく、典麗なお
方であつた。わたくしは、先代中村歌右衛門の扮する良辨
上人を聯想した。

その時わたくしは「勅修法然上人繪傳」を拜見してい
たといふ。

吉田 経三郎

「勅修繪傳」を拜見してゐると窓をかすめて花が散つて
來た。

あの春の京の旅については一度本誌に書いたことがあつ
たと思ふが、あれはまことにありがたい旅であつた。と、
いふのはあの日わたくしは細井さんのおかげで知恩院の御
門主と法然院の萬里小路さんと、大島徹水さんとおの三
人にお目にかゝることができたからである。

知恩院を辭したわたくしは細井さんに案内されて鹿ヶ谷

の法然院を訪れた。塵一つ目に立たぬ淨域に豪華絢爛な椿が露を帯びて咲きみだれてゐるのがきはめて印象的であつた。

瘦軀長身の萬里小路さんは黄櫨染めとでもいふやうな色の袈裟を召されてゐて、そのお姿には昔の上人たちを偲ばせるだけかさがあり、親しさがあつた。

春雨に煙る吉田山あたりの景色をながめながら靜かな上人のお話をうけたまはり山を下つて、大島徹水先生の女子家政學校に行つた。

先生は六尺豊かの巨軀に色褪せた墨染めの衣を着けてをられた。

先生は書棚のなかゝら無雜作に大きな林檎を取り出して「これは青森から送つてきました」といつて下された。

甘藷の葉莖を喰べたり、一本の幼根を二三寸の長さに切つて隣組中で分けたりしてゐた戦さのさなかだつたので薫りの高い、大きな林檎を一ついたゞくといふことはまことにありがたいことであつた。

今日も窓をかすめて花が散る。わたくしはあの春の京の

旅を懷ひ出してゐる。偶然にも淨土門の三人の高僧方にお目にかゝることのできた京の旅の一日はまことに尊い機縁の日であつた。

あの日から幾年もたゝない間にあの三人の高僧たちも相次いで示寂せられた。

わたくしが徹水先生に「御前さまは生死について、どんなにお考へになりまか？」とおたづねしたのに對して

「わたしは無理に生きたいとも思はぬが、無理に死にたいとも思はぬ」と仰せられた。

自然あるがまゝに生き、あるがまゝに死んでゆくことの尊さを物語るやうに、あの京の旅でお目にかゝつた上人たちは示寂せられた。

からだの丈夫なところはわたくしたちは平氣で、自分は死を恐れないと言ひ切ることができる。自分の心を裏切ることなしに、「死を恐れない」と斷言することができる。

しかし病んで日夜生死の關頭に立たされることになれば死を恐れないなどと強く言ひ切ることとはできなくなる。むしろ病のすゝむにつれて死を恐るゝ心はつよくなる。

深夜たゞ一人目ざめて病苦に呻吟する折など、むしろ靜かな死を待ち望むころにもなるが、一度病苦が鎮靜すれば、生きることの執着が殘忍なほど頭をもたげてくる。

わたくしを訪ねてきた客人たちは旅の話をする。明日から旅に出るといふ。或る友人は奈良や京都やの旅先からたよりを寄せてくる。

わたくしは友人たちの友情を感謝しつつも旅をつゞけることのできる友人たちの健康をうらやむ。そしてこの美しい自然からも、美しい友情からも永久に別れなければならぬ悲しみが薙々と胸に迫ってくる。ふと、庭の松の梢に高鳴きしてゐる小鳥を見ても、しみじみと生きてゐることのありがたさを感じ、やがて小鳥からも別れなければならぬであらう日を想像しては寂然たる思ひに囚へられる。凡夫の心境である。

しかしわたくしはこの凡夫の心境をさげすまんと、恥ぢようとも思はない。

花は黙々として散つてゆく。黙々として散つてゆくがゆゑに一層寂しく一層貴く拜まれる。

浄土トラクト

浄土編集部編

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 一割引
百部以上 二割引

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

(寺名等刷込み)
(二圓増百單位)

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上二、八圓
三百以上 一、五圓
送、五十部 每 八圓

大野法道著

五重^{ごじゅう}の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。



善人と悪人

——法然上人「小消息」講義（四）——

佐藤賢順

五逆十惡

十方に淨土おおけれど、西方を願うは、十惡五逆の衆生の生るゝ故なり。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは三念五念に至るまで、みずから來迎し給う故なり。

今回はこの一段のお話であります、これは五六行先きの、

罪は十惡五逆の者も生ずと信じて、少罪をも犯さじと思ふべし。罪人なお生る、況や善人おや。行は一念十念なおむなしからずと信じて、無間に修すべし、一念なお生る況や多念をや。

と對應しますので、合せてお話します。この一段は、淨土教が今までの佛教とは全く違つた見方で、罪惡の問題を解決している點で、歴史的にも、重要な意味を持つています。特に「罪人なお生る、況や善人をや」の一句は、のちに、法然上人の弟子と傳えられる親鸞が、「歎異鈔」（親鸞

の弟子の唯圓が集録したという法語集）の中で、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや惡人をや」といつて、善人と惡人の順序を逆にしてゐるのと比較されて、のちに述べますように、いつも話題となるのであります。

まず初めに字句の解釋。十方淨土とは東・西・南・北・四維・上・下の十方の淨土であつて、佛教はそのどこにでも佛が在しますと考へるのです。東の淨土には阿閼佛、西の淨土には阿彌陀佛、北の淨土には不空成就佛、南の淨土には寶生佛というように、それぞれの淨土にそれぞれの佛が在しますのです。五逆とは、父を殺すこと・母を殺すこと・阿羅漢を殺すこと・佛身より血を出すこと・僧團の和合を破壊することの五つ。十惡とは殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌・貪欲・眞恚・邪見の十の罪であります。三念五念は念佛を三度乃至五度稱へることであり、自らの姿を反省して、數々の罪を重ねたこの恐ろしい

身であることに氣ずいて、五度、三度、いや眞心からならば一度でも、念佛を稱えて佛にすがらるならば、佛は必ず救い導いてくれるからこそ、西方極樂淨土の阿彌陀佛に歸依し奉るのである、というのが、文字を逐うての意味であります。

罪の自覺

いま淨土教では、これまでの佛教とは全く違つた立場から、罪の問題を取り上げた、と言いましたが、それはどういう意味でしょうか。自力の教、聖道門では原始佛教以來自分の力で智慧を磨き、修行を續けて、生死解脱という大問題を解決しようとするのですから、自己を罪深きもの、惡人であるなどとは、考えません。あくまでも修行の力の備つた優れた素質の者と考えます。聖道門の苦悶は行苦です。行苦とはうつろい易いことから生ずる不安、苦惱、若い者が年老い、健かなる者が病み、やがては死にゆくという恐怖、一言でいえば無常迅速、生死のはかなさというところから生れてくる苦しみであります。従つて生死の解脱が淨土教以外の佛教の目的でありました。

しかるに、前回にも再三述べましたように、末法の世になつて、もう人間の力ではどうにもならぬことが、あつちにもこつちにも出てくる、なんともならないという深い絶望感に陥つたのであります。この人間反省から生れたものが、罪深き人としての自己の探求となつたのです。「智慧の

眼、盲い、行法の足、なえたる」われらという反省となつたのです。自らの姿は「あしたにもゆうべにも、營むことは名聞、昨日も今日も求めるものは利養」という淺はかな姿でありました。罪惡深重の凡夫でありました。この反省は、當然に苦しみを伴います。これが罪苦であります。淨土教は行苦に對して無關心ではありませんが、當面の問題は、罪苦であつて、いかにしたならばこの苦悶から救われるかであります。すなわち解脱でなくて救済であります。自分自らが五逆十惡を犯した(或はいつ犯すともわからぬ)身である、という自覺は、全く淨土教以外の佛教にはなかつたのであります。

人は物心つく頃になると、いつとはなしに罪を自覺しはじめます。罪が惡であり苦を伴うことを知りはじめます。子供が、可愛らしい嘘をついたり、隠しごとをするのは、罪を意識しはじめからではありませんか。年頃になるといよいよこの自覺は強まります。若い頃ほど世の中の汚れと矛盾とを強く感じて、これに反抗する時はありません。人生をほんとうに生きぬこうとすればするほど、人間の罪惡を強く自覺して、いかにしたならばこれが克服できるかに悩むのであります。青年は罪を自分や他人、つまりお互人間の責任として自覺するのです。しかし一時、壯年の頃には、罪の意識に麻痺してしまうことがあります。周圍にあまりに惡業が横行しているので、背任や汚職や贈賄が當

り前のことのように思われてしまうのでしよう。老年になつて、過ぎてきた長い人生を顧みると、また別の見方から再び強く罪は自覺されるでしよう。その罪のよつて來るところが、實に深く遠く宿命的で、人間の力ではどうにもならない、という氣がしてくるのではありませんか。

人間性に根ざす罪

では罪とは何でしようか。法律や規則や道德的慣習に違反した行爲は罪とされるでしようが、もしそれだけが罪ならば、法律や規則の條文と條文との間の空隙を、巧みにくぐり抜ければ、罪には問われますまい。禁制や慣習を破つても、上手に辯解すれば、罪とはなりませんまい。罪とは條文にひつかゝらないとか、うまく言いわけが立つとか、そんなことでのがれられるわけではないのです。では罪とは何か。法性ほつじやうの理に違背した行爲が罪で、これに隨順した行爲は善であります。諸法の實相に背いた行爲は罪であります。行いにはそれ自ら法性に違反して、本來罪である行いがあるのです。五逆十惡とはそのような行爲であります。佛教では罪を性罪しやうざい（本來の罪で、自他に損害を與える行爲）と、遮罪しやくざい（禁制を犯したために罪となる行爲）とに分けますが、性罪の方が一層根本的で、それは無智と結びついた宿命的な、人間そのものゝ本質に根ざしている罪なのです。

それならば「十惡の法然房」ということはどうということ

でしようか。法然房がほんとうに十惡というような重い罪の一つをでも犯したことがあるのでしようか。また實際に盗みをしたり人殺しをしたりしたことのない者に、五逆十惡の身であることを意識せよ、といつても、それは無理ではないでしようか。殺生・偷盜ということを廣い意味にとつて、他人を恨んで、あいつさえ居なければ、と思うことがあるとすれば、それは殺生罪であり、働かず他人の作った食物を食し他人の織つた衣服を着ていることは偷盜罪である、と考えれば、私どもは十惡罪のどれかを犯していることになります。そのことは今はしばらく措きましやう。十惡の凡夫とは、かつてこの私が犯したというのでは必ずしもない、私の數代前の誰れかゝ犯したかもしれない、その責めを私は引きうけなければならぬ、あの人が犯した、この人が犯したというのではなく、人間そのものゝ本性に、そういう危險が藏されている、という意味です。それからまた、將來いつどこで、そういう重罪を犯さないとも限らない、という未來に對する不安です。そう考えるならば、十惡の凡夫としての意識が惻々として迫つてくるではありませんか。罪とは人間性そのものに根ざしている根本惡をいうのです。

況や惡人をや

さてこゝで再び話題をもとへ戻して、「罪人なお生る、況や善人をや」という法然上人のお言葉と、「善人なおもて

往生を遂ぐ、況んや惡人をや」という親鸞聖人の法語とは、
 どのような關係にあるのか、を考へてみましょう。これは矛盾
 することと言つてゐるのでしようか。矛盾ではありません。
 ん。同じことです。上人の「況や善人をや」の方は、この
 現實の社會で生活を營んでゆくためには、お互は法律や道
 徳を——つまり人間がお互に定めた約束を、守らなければ
 ならない、これに背いたものは、罪人として制裁されねば
 ならない。しかし一度罪を犯した者は、そのまゝ責苦を受
 けて、いつまでも罪の世界に沈淪するのかといへば、心か
 ら懺悔して如來の本願に歸命するならば、罪を消されて救
 いを受ける、だから罪を犯した者も絶望せず、念佛稱名
 を怠らず、如來のお救いを願ひ、お護りを受けるがよい、
 というのであります。罪を犯した者は致し方がないが、惡
 人の方がよいというのでは決してないのです。善人の方が
 よいことは、きまりきつております。いわば主として人間
 と人間との關係、倫理的見地から罪人を見たのがこの法語
 であります。ですから上人は、「七箇條起請文」の第三條で
 「念佛門におきては、戒行なしと號して、もつばら飲酒食
 肉をすゝめ、たまたま律義を守るをば、雜行人と名すけて
 彌陀の本願をたのむものは、造惡をおそるゝことなかれと
 いう事を停止すべきこと」と、弟子達を誡めております。
 これは、淨土宗が開かれてから約三十年ほどたつて、淨土
 宗には戒行はいらない、惡人ほど如來のお慈悲を受けてお

救いにあずかれる、という誤解が擴がつて、南都北嶺の舊
 佛教がこれを理由に彈壓しにかゝつたので、それに對して
 淨土宗の本旨を示し、併せて弟子達に誓約させた起請文の
 一條であります。

けれども考へてみれば、倫理的立場からお互が善人とい
 う惡人というけれども、その善人という者も、腹の中を斷
 ち割つてみれば、佛のような慈悲心から善行をしているの
 ではない、本人ははつきり意識してゐないとしても、何か
 求めるところがあつて、やつてゐる行爲である、利己心、
 邪心をすつかり離れて、澄み切つた心でやつた善行ではな
 い、ということがいえるでしょう。その反對に、惡人とい
 う者も、よく事情を知つてみれば、何か理由があつて惡行
 を犯したのである。どうしてもそうやらざるを得なかつた
 わけがあるのであらう、性格的にか、遺傳的にか、環境、
 家庭、教養の上からか、宿命的なものがあつたのであらう
 と考へてやらねばなりません。つまり善行、惡行をもつと
 立體的に考へてやらなければならぬのです。そうすると
 善行、惡行の區別は殆んど見分けがつかなくなつてしま
 います。人間のやる行爲は、すべてが善であるともいえ
 るその反對に、すべてが惡であるともいえます。そして善な
 るものはたゞ如來ひとりのみということになります。つま
 り、罪を如來と人間との關係から考へるようになるので
 す。このように考へ方の進むのは、倫理的な見地から宗教

的な見地へと進むことで、こうなつてくると、如來の大慈悲というものが、いよいよ高く大きく仰がれるようになり人間の慈悲は、慈悲という名に値しない小さな低いものであることがわかつてくるのです。そしてこの如來の大慈悲こそ、一切衆生を救う力であり、何かわけがあつて罪を犯した悪人の方を善人よりは、一層深い心づかいを以て目をかけて下さる、ということになるのです。言葉の上では善人と悪人との順序が逆になつてきます。法然上人にこの宗教的立場からのお言葉がなかつたわけではありません。醍醐本の上人傳にはそういう意味の言葉が残つていますし、晩年には、しばしば、そのように宗教的見地からお説きになつたのではないかと思われれます。

七箇條起請文が書かれたのは、元久元年で上人の七十二歳の時です。別に證據はありませんが、小消息の書かれたのはこの頃か、もつと晩年ではないかと思われるのです。七箇條起請文には八十八人の弟子達が連署して起請していますが、終りの方に緯空という名があつて、これが親鸞の若い時の名だとされています。親鸞は宗祖が七十歳位、彼が三十歳位の時に、弟子入りをしていますから、この頃にはすでに弟子の末席に加つていたのです。そして法然上人の晩年の信仰に深く影響されていたのでありましょう。それであるようにつきつめた、時には誤解を伴うような、言い方をしたのではないかと思われるのです。

衆生からの働きかけ

しかし「善人なおもて往生をとぐ、況や悪人をや」といふとき、いつも問題になるのは、宗教者としての道徳的責任が少しも問われていない、ということなのです。如來の慈悲や光明があまり大きく仰がれて、衆生を包んでしまうので衆生としての爲すべきことが全く忘れられてしまふ、ということなのです。實はそれでは、かんじんの救済ということが成り立たないのです。初めから光明に包まれているのですから、もう既に救われているので、今更、救われる必要もないのです。罪に苦しむことも不安に戦くこともいらないというわけです。救済は衆生の側からの働きかけ、懺悔とか稱名とかがあつてこそ、成り立つのであります。ひとを訪問したときに「どうぞそのまゝで」といわれても、外套を脱ぎ襟巻を取つて挨拶するのは、やはり禮儀でありますから、もう既に救われているので、今更、救われる必要もないのです。罪に苦しむことも不安に戦くこともいらないというわけです。救済は衆生の側からの働きかけ、懺悔とか稱名とかがあつてこそ、成り立つのであります。ひとを訪問したときに「どうぞそのまゝで」といわれても、外套を脱ぎ襟巻を取つて挨拶するのは、やはり禮儀であります。

善導大師はこの衆生からの働きかけについて、次のように述べています。「衆生、行を起して、口、常に佛を稱す

ビルマの花まつり



山田隆元

敵艦に、をびやかされつゝの、月餘の船旅行の疲れ癒えぬに上陸後引續いての急行軍、静から動に、そして戦場の一員となりし私は死とか、生を、考へず、唯、休養の日は、何時來るか、考へるのみであつた。

—◇—

「ビルマ」の各地に或は景色よき山の上に河の邊りに、違つてゐる「バゴダ」(佛塔)是は入寂せし、住職の爲に建立せし、塔であつて、生前の働き功績の大小、によりて、塔の大きさも大小あり、白壁塗りもあり、等様々であるが、部落ある所には、必ず寺があつて又「バゴダ」も十五、六塔は、建てられて居る、寺に居る僧も、多少はあれど、數人より多いのは、五、六十人も居りて、午前十時頃の托鉢の後は、部落の子供、五、六才より十二、三才位までの子供を集めて、讀、書、算、歌、等を教えて居る。

だから「ビルマ」の住職は、私は、寺院の住職であり、學校の校長であると言つてた。此「バゴダ」の塔頂の輪に、風鈴が一塔に少なくとも、二十、から三十位、吊されて居て、此風鈴が、風に揺れて、カラッ、コロッ、カラッ、コロッ、と、大小の音を立て聞えて來る時、特に月の夜や、河邊りに、汗をぬぐつ

昭和十七年四月二十日、「ビルマ」の「ラングーン」へ師團の補充將校として上陸して以來野戰小隊長としての私は、二年間、老將校が若き兵に伍しての行軍、今日も、明日もとキラツク太陽の下、熱地に吹きまぐる砂塵、汗と砂塵にまみれて、顔もからだも、砂だらけ、噛む齒もぢやりつき、夜は夜風に乾きし自分の顔に手をやれば、さらさらつと、手に感ずる。

大休止にて、道路の兩側に、仰向けになり

てる時等には、遠く故郷の寺の鐘の音が、偲ばれるので、旅愁の淋しさを一しは感ずる事が、多かつた。

—◇—

一作戦終りて、一地に部隊が駐留してる時私は休暇を利用して、勉めて、近くの寺を訪ねて「ビルマの佛教」の真相を、質ねた。

嚴肅な戒律を護つて居る「ビルマ」の僧とゆかの高い縁側に對座して、椰子の葉蔭に、椰子の葉で作りの大團扇を靜かに動かして、「ビルマ」の僧と兵隊が、遊茶をすゝり乍らにこやかに語り合つて居る様も、「ビルマ」作戦間の、よき一コマであつたと思ふ。話に飾り氣も無く、嘘も無く、世界最大の言葉、「バリ」語を用ひてゐると言ふ事を、ほこりとして居る位にて、争ひ事や、下品な話を好まず、時に黙して、冥想に入り、又話すと言ふ、姿は尊くさえ、見えた。

—◇—

私が油田地「エナンジョン」の北方に在る「キョクバダン」と言ふ、小さな市場町に、行つたのは、「ビルマ」の母と呼ばれて居る「イラワチ河」と、平行して流れて居る、「チンドウイン河」の、渡渉場偵察と言ふ、一任務を終つての歸路であつた。

私達を乗せた、軍用トラックが、凹凸はげしい田舎道を、熱地特有の砂塵を上げて、部落に入つた時、部落の女や子供が、盛裝して出て来て、片手に花、片手にコップに水を持つて居り、停つたトラックから降りる兵隊に誰彼の區別無く、コップの水をかけるので、驚いたり、怒つたりした。然しやつてゐる子供や女達は、キヤツ、キヤツ、と言ひ乍ら、逃げる兵隊へ、笑ひつゝ、又も又も、水をかける。

其内兵隊の中の誰かが今日は「四月八日だ花まつりの日だ」水をかけられても怒るな、此土地の風習だ、有難いと思つて受けよと言つた。

是は灌佛の一作法を、やつてゐるのだと思つた。「ビルマ」人は、此日は歡ひの水を、頭つ意味にて、誰にでも水をかけ、又誰にでも力に應じて、接待をするのだとの事である。其夜は「キョクバダン」泊りなので、部落の集會場を借りて、宿泊した。

—◇—

其夜私が訪ねた、部落の寺の住職は、最近まで兵隊が滞在してた寺でもありし故、別に怖けた様子も無く、「ビルマ」の花まつりについて話して呉た。

今日の晝、かけられた水は、釋尊降誕の歡びの水であつて、昔は香水を、水に混ぜてかけたものだが、今は戦争中だから、品不足で水のみをかけるのだが、怒つてはいけなさと教えられた。其代り此日は、何處の家を訪ねても、氣持良く、何か食べ物を、供養して呉れる、然し酒は出さないと云はれた。

「ビルマ」の花まつりは、四月八日を中心にして、三日間各地で、盛大に行はれる。

此寺は、田舎の寺だが、油田地近くの故か自家發電機によつて、豆電氣を澤山つけて、御堂や、「バゴダ」をイルミネーションして、夜間遠方より參詣する人達を、喜ばせて居るのは、電燈の無い部落だけに、夜空に明るく輝いて、遠望すると美しく見えた。

—◇—

御堂の中は、御本尊の前に、摘花を籠に盛りて、澤山供え、花の香りが、堂内に溢れて居る、蠟燭も數本立つて居り、別座に誕生佛を安置し、其前にも花が供えられ、供物も「ビルマ」米の、おいしそうな御飯が、平盥に山と盛られてあり、其前に線香を澤山立て、參詣人は、平座して、日本人の正座を少しくずした形にて、座し、盛んに座禮しては、「ビルマ」佛教徒の念佛とも言ふべき「ボンサンダ

「ラナーケーサーミー」、「マンマンケーサーミー」云々と、南無歸依佛、歸依法、歸依僧、と言ふ意味の語を唱えて居た。

—◇—

參詣人は、大理石の床に正座して居るのだが熱地の事故、調度氣持がよいらしく、中には隅の方で、横になり、寝ころんで、やつてる參詣人もあり、或は話をし乍ら、其合間に「マンマンダナーケーサーミー」とやつてる者もあり、御堂の中は線香の煙と、念佛の聲と話し聲とで、騒然たるものであるが、何れの顔を見ても、法悦に浸つてゐる、面持で、至極和やかな風景だ。

御堂内の、壁畫や額は、總べて、釋尊一代記である。

—◇—

御堂の前の廣場には、無料で參詣人に見物さして居る、露天の舞臺が作られ、一回五時間もかゝる、釋尊の一代記が、「ガミラン」の音楽を伴奏にして、幾度も、繰返して、三日間續けて演ぜられるのだが、見てゐる方も、莫座を砂の上に敷いて、縁者や、知己等と共に持參した食べ物や、煙草を喫み乍らのんびりと見物したり、話したり、笑つたりして居る。但し酒や勝負事を行つてゐる者は居

ない。かゝる場合では決つして「ビルマ」人は、不作法な迷惑になるような事は、憤んで居る。

物賣りも、出てゐるが、珠環や線香、食べ物位で、大した品は賣つて居ない。

—◇—

參詣人の女は、顔に白粉を、頭に生花の二輪をさし、白い「シャツ」に、腰のまわりに色とりどりの、「ロンヂ」(腰巻用のもの)を着し、男は幼い時から一度でも、寺に入りて修業した者は、桃色の「ターバン」を、修業しない者は、黒色の「ターバン」を、頭に巻き、白い「シャツ」に、地の厚い黒か紫の「ロンヂ」を腰に纏つて居る。

何れも盛装にて、子供達、特に幼ない女の子達は可愛らしく見えた。

夜更けて歸宅する者、寺に御籠りする者、等三日間晝夜共に、寺は賑はひ、年一度の近郷に住める者同志が相寄りて、釋尊降誕祝賀の日と見られた。

—◇—

私が寺を辭する時、兵隊の二、三名も參詣したのか、露天舞臺の前に腰を下して、故郷の花まつりを語りつゝ「ビルマ」人と共に見物して居た。

兵隊は、軍靴を履いたまゝだが、「ビルマ」人は、寺の境内に入ると、貴賤の別無く、覆き物を、脱ぐのが、佛様に對する、禮として居るので誰も覆いて居らなかつた。

—◇—

日本軍が「ビルマ」へ入國當時、進軍せし各地にて寺の門を入ると直ぐ、「ビルマ」人なら「靴を脱いで呉れ」と、言はれて面食つたとの事だ。

「ランゲン」の「セダコンバゴダ」(金の佛塔)や「マンダレー」の郊外に在る「アランカンバゴダ」(アランカン攻略記念の佛塔)等の御堂は、廊下から御堂内全部、磨き上げられた、白色の大理石だが、掃除不充分にて、可成りよごれてた、然し御堂の入口には、日本軍政監部の立てし大きな告示板が立てられ大きく「脱靴」と書いてあつて、日本人は是に遵つた。

「脱靴」について、英軍當時はどうだつたと聞いたら、「信仰心無く、禮儀知らず」の人達故「人間として考へて居なかつた」と寺の入口で象牙細工や、珠数、線香、蠟燭、それに、本尊の御佛體に貼加する、薄い一寸五分角の金箔等を賣つてゐる店の主人は、語つて居た。(在巢鴨 元弓部隊小隊長)

北邊の開教 (三)



石 上 博 應

六

文化元年五月、徳川幕府が蝦夷地……今の北海道の厚岸に國泰寺、様似に等樹院、有珠に善光寺この三箇寺を在地の諸役人並びに渡來の和人のために創建した當時、わが淨土宗の寺院は

檜山郡に七箇寺

松前郡に五箇寺

爾志郡に六箇寺

龜田郡に三箇寺

上磯郡に三箇寺

都合二十四箇寺で、然もその所在地域は前にも述べたように何れも、道南の五郡に限られていたのであります。

それでこのうち有珠の善光寺の創建は、東蝦夷地海岸にわが淨土宗の宗光弘通の基盤となつたのでありますが、一體、幕府がこの三箇寺を建立した要因は、多分に露人の南下に備えるためであつたと言はれております。

即ち露人が千島を南下すると共に、切支丹宗も之に伴つて、次第にわが本土に近付きつたあつたことは、既に知られておりました。ですから、蝦夷地御用係が、蝦夷地經營の當初に於て定めた法三章にもその第一に、邪宗門の禁判を掲げてある位です。

然も、特に之を強調せざるを得なかつたのは、大きな理由がありました。それは寛政十一年に、近藤重藏が擇捉島からもたらした十字架が、露國から歸還した漂流民光太夫の鑑定に據ると、正しく切支丹信仰に深い關聯のあることが明かにされ、これによつて擇捉島の土民の間に切支丹信仰者があることを裏書されたからでもあります。

六

幕府はこの切支丹宗の南下に對する對策を考へなければならぬことになり、それがこの新寺取立となつて實現したのだと思はれます。

一體この新寺の取立は、元祿以來幕府で禁じておりましたが、蝦夷地は内地と異り、幕府直轄以來、幕吏を初め南部、津輕の士卒の外農商渡世の和人が渡道して滞在するものが日を送つて増加して來ましたので、葬禮、供養等にあたる寺院と僧侶が尠くいところから諸事不便であつたのと、蝦夷地は、わが國の露國に對する國境でもあるという理由で、亮和二年九月、蝦夷地奉行は、寺院の新規取立を企圖し、寺社奉行に交渉の結果、これを認められて、新寺創建の準備を進めていた。すると十一月になつて、閣老から箱館（函館）奉行に對して

「寺院の建立は、單に在勤幕吏のためばかりでなく、宗門取締りの一助にもなるから早々に、東蝦夷地（現在の北海道東海岸）に新寺を取立ててよろしい」といふ達しがあつたのであります。

そこで、全然寺院の設置されていない東蝦夷地に、五箇寺を建立する豫定のもとに、取り敢えず三箇寺を設立することに決定し、翌

文化元年五月有珠、樣似、厚岸の三場所に、各々寺院を建て、住職を任命した。住職は翌二年三月、江戸を發して、それぞれ任地に向つたのであります。

即ち文化元年厚岸に國泰寺、樣似に等樹院有珠に善光寺を取立てた。此の新寺建立は前に述べたように幕府並に出先幕吏の企圖で、特に戸川筑前守の盡力が預つて力があつたと言はれております。

今、新選北海道史に據り、吾が淨土宗の有珠善光寺取立に關する幕府、寺社奉行、蝦夷地奉行との間に交渉のあつた資料を拾つて見ることになせう。

（つづく）

（八頁よりつづく）

れば、佛、即ちこれを聞きこしめす。身、常に佛を禮敬すれば、佛、即ちこれを見みそなわす。心、常に佛を念ずれば、佛、即ちこれを知らしめす。衆生、佛を憶念すれば、佛もまた衆生を憶念し給う。彼れ此れの三業は相捨離あひはなせず、故に親縁しんえんと名なずくるなり。」これは身口意の三業に修するところの、衆生の側からの働きかけを説いたものですが、罪の懺悔、社會人としての道德的責任の負擔をいう場合にも同じことです。

田邊哲學で名高い田邊元博士は、初め道元禪師に傾倒して禪佛教に入り、無即愛むじくあいという思想に達して、一轉して親鸞聖人の「教行信證」を通して淨土教に移りました。しかし親鸞の教えには道德的責任について少しも明かにされたとろがない、という不満から、ついにキリスト教に轉向してしまいました。田邊博士は法然上人をよく知らなかつたのです。この轉向は淨土門徒としてお互に深く考えるべきことであります。

（つづく）

人形劇



花まつり (二まく)

森 正義

出てくる人形

うきぎのビヨン子

おさるの三吉

ぶたのブー太

きつねのコン助

用意するもの

ボール紙でこしらえた花御堂

セルロイドのキュービー

れんげ・たんぽう等の花たば

下手より、うさぎのビヨン子花を手に、うたいながら出てくる。

ビ「春がきた。春がきたどこにきた。

あー。いゝお天気なこと。空にはひばりがさえずつていゝし。お花もたくさん、たくさん咲いているし、うれしいわ。

おかあさんに、れんげのお花、つんでいつて上げましょう。」

ビヨン子、上手でつむしぐさ。下手よりおさるの三吉おどりながら登場

三「エッサ エッサ エッサ ホイサッサ おさるのかごやだ ホイサッサ……」

指つかい人形劇の

演出法

人形が出来上つたら、いよいよ人形に、お芝居をさせるのですが、先づ人形の使い方からお話しましょう。人形の頭は人さし指、人形の両手は、拇指と中指で、あつかいます。指の腹で手の板を押えてあつかいます。筒の場合は筒の中へ指を入れます。この場合両手が、いつもバンザイをしている使い方をする人が多いが、これは衣装をつくる時、うでの部分を、ゆつくり目に、ぬつて置かれるといろしい。次に基本練習に入ります。

①頭だけ動かして、おじぎをさせる。

②両手をそろえて頭をさげる。

③笑わせる（両手をはつて胸をそらせる）

④おこらせる（両手をはつて身體をそらせかたく動かす。）

⑤泣かせる（両手を顔によせて、からだをふるわせる。）

おどりをやめて、

三「アー ビヨン子ちゃんが、お花をつんでいるよ。びつくりさせてやろう。」

そーつと後から、ビヨン子に目かくしをする。作りごえで

三「だれだかあててごらん。」

ビ「アーラ。いけないわ。いけないわ。いたづらしては いけないわ。おかあちゃんに言いつけるわよ。(半分泣き聲で)おかあちーやーん。」

三吉はなさない。ビヨン子、そーつと、三吉のうでをさわつて見る。

ビ「わかつた。三吉ちゃんでしょう。あてたからはなしてよ。」

三「バー」

ビ「三ちゃん。わるいわねー。」

三「ビヨンちゃん。きようは、何の日か知つている。」

ビ「知らないわ。何の日だか教えてちょうだい。」

三「おどりをおどつてくれたら教えて上げる。」

ビ「きつとよ。教えてね。それじゃおどるわ。ソソラソソラ うさぎのダンス タラッ

タ ラッタラタ ラッタラッタラ。」

ビヨン子おどる。

三「うまい。うまい。うまい。」

手をたたく。

ビ「あーくたびれた。三ちゃん おどつたから教えてちょうだい。」

三「今日はね、おしやかさまのお生れになつた花まつりなんだよ。さつき櫻の木にのぼつてねんぶつ寺の本堂を見たらね、赤ちゃんのおしやかさまを、花御堂におまつりして、子供たちが、たくさんお花を持つて、おまいりしてたんだよ。」

ビ「そーお。おしやかさまがお生れになつた日。おかあさんが四月八日は花まつりだよ。

つておつしやつてたけれど、今日がその日なのね。三ちゃん、私たちも花御堂つくつて赤ちゃんのおしやかさま、おまつりしましょう。」

◎おどらせる。(その他)

次に兩手に人形をもつて使う練習をします。ギニョールは、指先で使うのではなく、身體全體を使つて動かすのです。兩手を使う練習が出来たら小道具を持つて動かす練習をします。せりふは、使い手自身が言う方がよい。人物に、小道具を持たすには、小道具に針金の輪をこしらえて置くといよい。舞臺は、お遊び室ぐらいの会場ならば机の後側に、ふすまか、戸板のようなものを立てかけて、テーブルクロス、毛布等のものを掛ければよろしい。たゞし、この際兩端は、ふすま、カーテン等で、舞臺のそでを、作つて置くことを忘れないことが大切です。人形が舞臺の下へ消えてゆく事は特別の場合以外は必ず上手、下手から、出入するようにしたい。装置は、初心の間は背景に畫を描いたもの位で良いが、立木やくさむらは圖のような切出しを作つて置けば良い。舞臺下は不要だから、その部分は支柱でよい譯です。尙、背景、切出し、人形の衣裝の色彩は、光を吸収するかしない

三「そうだね。そんなら僕、花御堂つくる。」

ビ「そんなら、わたし、この、お花あげるわ。」

三「ぼく。花御堂。こしらえてくるから、ビヨンちゃん おしやかさま。つれておいでよ。」
三吉、下手に去る。

ビ「こまつたわ。こまつたわ。」

おしやかさま。どこにいらつしやるだろう。まいごのまいごの、おしやかさまやーい。」
兩手を口にあてて、大聲で呼ぶ。下手からブー太登場。

ブ「ビヨンちゃん。何をさがしているんだい。」

ビ「あのね。きようは、花まつりでしよう。それでね。おさるの三ちやんと花御堂つくるの。三ちやんは花御堂つくりに戻つたれど、あたしに、おしやかさまつくれと言うのよ。赤ちやんのおしやかさま。どこにいらつしやるかしらない。」

ブ「そうだねー。念佛寺に行つたら、はだかで甘茶をかけてもらつていらつしやるけれどあれかりてくるわけにはいけないしねー。ぼく。これから町へお使いに行くから、さがして来て上げるよ。ではさようなら。」

ビ「さようなら。」

ブー太上手に去る。下手よりきつねのコン助登場

コ「ビヨンちゃん。何をさがしているの」

ビ「おしやかさまよ。赤ちやんのおしやかさまをさがしているのよ。」

コ「ワツハツハツハ ヲツハツハツハ

おしやかさまかい。おしやかさまは。そうだ。さつき谷川を流れて行つたよ。」

ビ「まー。もつたない。それではすぐ。おつれしてくるわ」

ビヨン子。下手にあわててかけて行く。

三「ワツシヨイ ワツシヨイ。」

三吉、花御堂をかついでくる。コン助も、走つて行つて二人でおみこしのように花御堂を「ワツシヨイ ワツシヨイ」



かを研究して（例えば、灰色は光を一番吸収する色。）出来得る限り効果を出すように注意をします。尙、人形が急に消えたり別の姿になつて出て来るには、舞臺の下に急に消えたり、舞臺の下から煙草の煙と共にあらわれるようにすればよろしい。（この際夢幻的な音楽のレコードをかけると効果的です。）音楽は必ず入れる事が必要です。尙人形劇は人形が演技をするのであつて、使い手がするものではありませんから、出来る限り人形に百パーセント、身振りをさせる

と言いながらかつぐ。かつぎながら

コ「あー。おもしろかつた。うさぎのビヨン子。おしやかさまをさがしに谷川に走つて行つたよ。ワツハツハツハ。じや三ちゃん。あばよ。コンコンコン」

コン助上手に去る。

三「ビヨンちゃん。どこに行つたんだらう。おしやかさまなんか谷川にはいらつしやらないのに。どこへ行つたんだらうな。オーイ。ビヨンちゃんヤーイ。」

下手よりビヨン子、セルロイドのキュービーをだいて出てくる。うれしそうに

ビ「三ちゃん。おしやかさま。おつれしてよ。ほーら。はだかで、右手を上げていらつしやるでしよう。」

三「ビヨンちゃん。いいおしやかさまだねー。よくおしやかさま。あつたね。」

ビ「きつねのコンちゃんに教えてもらつて谷川へおりて行つたら、あの岩のそばで、くるくるまわつていらつしやつたのよ。もつたないので、おつれして來たの。」

三「そんなら、すぐ、おまつりしよう」

花御堂の中にキュービーをまつる。ビヨン子はお花をさぐげ、三吉は両手をあわせておがむ。二人は手をふりながら、うたいおどる

歌がそろえば、手もそろる。

トコ セツセ

おどりの中の 花御堂

いわう われらを やさしげに

ソレ 見わたしたまう

佛さま トコセツセ

—— おどりながら —— 幕 ——

演出ノート

登場の人形は四つですが、両手を使えば一人で結構演出できます。セルロイドの、キュービーをあくまで、おしやかさまと思つているところに、おかしみがあります。花たばには、針金を、輪にして手首にかけておくとよいでしょう。

ようにします。ギニョールは足が無いのに足があるように観せなくてはならないのですから餘程人形を上手に使わなくてはなりません。その練習として鏡の前で、人形の動作を研究するのですが、臺詞と動作との一致、人形の背面を見せる研究、舞臺一ぱいを使う練習、舞臺から下方へ人形がさがらない注意等を、よく研究するのであります。保育教材としての人形劇の演出には、この點に注意されゝば結構ですが、先生方が一人一役を持たれて、園児達に觀せられたら、こども達はどんなにか、よろこぶ事でありましょう。一人一役づゝ持つて多人數で演出する場合は、舞臺裏の面積を、うんと廣く取つて置くことが大切です。ギニョールを使うようになつたら、そのギニョールに愛情をそそいで、人形の中に佛を見出し、自己を人形の中になげこんで演出する信仰的高さへまで導入しなくてはなりません。さてこれで上欄の劇をやつみて下さい。

釋迦牟尼

降誕

遙かなる

インドの國に

あげなせる

とわに變らぬ

みほとけの

言葉ぞ　これ

われのみぞ

獨り尊く

われのみぞ

獨り尊し。

意　譯

中夜禮讃

吉田定久

1、勝れし天人崇めます

阿彌陀を謹み敬まはん

安けき國に在まして

多くの佛子に仰がるゝ。

2、輝く色身並びなく

奢摩他の歩み靜かにて

兩目は淨き蓮の色

故に仰かん彌陀尊を。

3、み顔は月と晴澄みて

威光は千の日の如く

み聲は天鼓か將た鈴か

故に…(同前)

4、觀音彌陀を敬うに

その妙相の莊嚴は

惡しき魔等を降すなり

故に…。

5、世に比いなく清らけき

徳を累ねて空のごと

自在に施し利益せり

故に…。

6、十方に聞えし菩薩衆

卑しき魔等も讃う也

救いの願に生きよせば

故に…。

7、金底なす池に咲く

善根の花を台とし

上に在ます氣高さよ

故に…。

8、十方の諸の佛子は皆

神通を振り集いては

尊顔仰ぎて敬いぬ

故に…。

9、諸有は常なし我も亦

露影電水面月

花は咲き

鳥は歌いぬ

この良き日

日は輝けり

みほとけの

おしえぞ
これ

ひと、一人

生まる 尊さ

ひと一人

生きる、尊さ

(竹中信常)

世に無名字を説き玉う 故に……

10、悪の名もなき彼の佛刹 溺れ苦しむ怖れなく 故に……

衆人擧りて敬いぬ 故に……

11、方便つきぬ彼の境 迷い惑はす憂いなく 故に……

進みて菩提に至る也、

12、釋迦は説けり彼尊 功徳の海や邊りなし 衆生を彼國に生しむと。

獲玉う力ほどこして

譜を附けて讀むのが本則ですから漢讀の原文を譜の代りに附けます。

南無至心歸命禮、西方 阿彌陀佛

すくいませ めぐみの あみだ

稽首天人 所恭敬

すぐれしひじりイ あがめますウ

阿彌陀仙 兩足尊

あみだをつししみ うやまはんン

在彼微妙 安樂國

やすけきくにイ ましましてエ

無量佛子 衆圍繞

おゝくのみこにイ あおがるゝウ

願共 諸衆生 往生安樂國

われらねがいて みもとにゆかん

(五偈と無常偈は次回)



法悦の旅

誕生寺より知恩寺へ

山中昇

○昭和二十八年十月十三日—十九日

この七日間こそは、私が九北州廻りと、岡山縣誕生寺并京都百萬遍知恩寺詣りの旅を續けた日で私の生涯忘れ得ぬ尊くも有難い記念の日であります。

私は、この旅行中、見たもの聞いたもの、又、その折々に感じたことどもを、手帖に書きつけて來ましたが、その中の二三を抜き出して、心からにじみ出た詩十余種を拾ひ出して見ました。もとより拙ないもので、お恥づかし、**「淨土」**誌上に御披露するのも如何かと案じてゐたのでしたが、私のこの悦びを、皆さんにも悦んで頂きたいと思ひます。

○十三日出發

私この度の旅行は、誠に信仰の旅行であり、法悦につままれた有難い旅行でありました。出立の際拙詠一首。

この旅は世にありふれの旅ならで

彌陀のみちびく法悦の旅。

○十四日—十六日 北九州廻り

別府、耶馬溪、有明海の航行、島原、雲仙、雲かたまごう山々を

遠く望む橋邊等々、風光明眉の絶景は、次ぎから次ぎと展開されて目と心を楽しませてくれた。私はこの恍惚たる眺めのうちに有難いことだと思つた。拙詠一首。

美しきながめに見とれ思ふかな

甚深微妙ののりの姿と

○十七日 誕生寺詣り

午后一時頃誕生寺へ着いた。あゝこれが私多年のあこがれの誕生寺かと、山門をはいると、たゞ有難く頭がさがるばかりです。寺へ参り來意を告げますと、喜んでお迎え下され、早速奥へ通されて、お茶など出して下さつた。旅の疲れもありませうから、くつろがれるやうにと、すゝめらるゝまゝに旅装を解いて、ゆつくりお茶をいたしました。

それから私は、なつかしの棕の木の前に行きたかつた。漆間様にお願すると、すぐ案内して下さつた。私は棕の木のみ前に合掌。何んとも言いない感激に胸ふるはせながら、帯をお借りして掃き淨め漆間様と御一諸に、記念の撮影をさせて頂きました。拙詠一首。

なつかしや由緒も深き棕の木の

み前きよめて、影うつすかな

お風呂の感謝

漆間様は、私共のために特に早く風呂をたてゝ下さいました。入浴をすゝめらるゝまゝに、お湯に浸つた。誠に有難いことでございます。拙詠

あたゝかき心は風呂の湯となりて

旅のつかれをあらひ給はる

誕生寺風呂の湯あみのうれしさよ

浄土の風呂もかくやあるらん

誕生寺浄土の風呂と思はれて

たゞ有難や南無阿彌陀佛

入浴を終へると、漆間様から御開帳とのお言葉があり、御本堂に案内され讀經中に御開帳下されました。

私は、法然様のお木像の、み前近く合掌禮拜感激に胸轟かせたその一瞬、法然様から「よく來られたナ」とお聲を、かけられたやうに感じられました。感激のあまり拙詠一首。

み佛のみ前に合掌一刹那

お聲かゝりし心地なりしよ

浄土門和讃

お木像の御側近く合掌し、誕生寺様の御法話を拜聴し易行道の有難たさに感激自ら新なり。拙詠

ありがたや浄土の門をおしひらき

われらのゆくて照らしたまはる。

浄土門他力易行の道しるべ

しめしたまうぞ有難きかな。

迷子をすくはんものと易行道

しるべかゝけておしえみちひく。

ありがたや他力易行の浄土門

念佛衆生攝取不捨。

佛教と政治

漆間様は、誕生寺村の村名について「當地は、もと稻岡南村と、よばれてゐたのだつたが、現村長さんのお考へで、昭和十九年に村民の投票によつて誕生寺村と改められたのだ」とお聞かせ下さいました。私はこのお話しを聞いて深く考へさせられました。思ふに村長さんは、村を治める根元を佛教に求められた。つまり佛教を中心として村を治める。こうしたお考へのもとに、先以て人心を新にすべく村名を改められたことゝ信じます。

私は、政治も佛教も共にその歸するところは一つであると信じます。政治もその究極の目的は、この人の世を淨い、住よいものにするといふことでなければならぬ。その他のことは、皆この目的を達する手段方法乃至政策に過ぎないものであり、佛教も亦人類社會を淨土化すること即ちこの世に極樂淨土を建設するということとでなければならぬと信じます。

こう考へますとき、政治即佛教佛教、即政治だと思へます。私は今の政治家特に町村長乃至議員の方々が宗教(佛教)に對し深い關心と理解をもち、大いに佛教興隆のために力を致されんことを希ふと共に宗教家(僧侶)の方々も、寺内に引込んでばかり居ないで宗祖の心を心として一段の御奮起を賜はらんことを、切に要望して止まないものであります。誕生寺村の改名を聴き感謝に深し。

私は茲に謹んで誕生寺村長さんの英斷に敬意を捧ぐると共にこの

村長を戴ける誕生寺村は幸なる哉に叫ばずに居られませんか。拙詠二首

村治め國を治むる要諦（大本）は

彌陀のおしふるのりにこそあれ

人の世を淨く正しく和やかに

おさむる道こそ政治なるらめ

○十八日、百萬遍知恩寺

六十六世法王故中島觀瑠上人のお墓参り

故上人は、嘉永元年私が住んでいる茨城縣石下町西福寺に生れ、明治五年同寺二十二世の住職となられたと聞いてゐます。

西福寺住職時代の郷土に於ける上人は、報恩講の興隆に將又德育會なるものを組織して、青壯年層の德育向上に、力を致された。上人不動の信仰から迸り出る熱と誠の法話説教は、怒濤の如き迫力を以て、聴衆を感動せしめ、その心を動かさずにはおかなかつたことを記憶する。蓋し郷土に於て、上人の感化を受けないものは一人もないであらう。誠に上人の德化遍く、郷民の等しく追慕渴仰して止まないであらう。若し夫れ中央に於ける上人の日曜通俗佛教講話に至つては、正に是れ明治佛教界の華であつたろうと信じます。

思へば、上人は眇たる西福寺に身を起し、何んの學歴とてもなく而も遂に京都百萬遍知恩寺の法主となられたのである。

この偉大なる宗教家中島觀瑠上人を生んだ地こそ、實にわが石下町なのであります。私は今、その墓前に参し、了蓮寺伊藤師の讀經に聴入り感慨最も深し。拙詠二首

上人のみ魂こもれる御墓に

たゞひれふして感無量。

御墓の影をうつしてふるさとの

西福寺へとおさめまつらん。

知恩寺了蓮寺様方では、一晚泊つて、ゆつくり京都を見物して、歸られるやうにと、強いておすゝめ下さつたのですが歸途藤井實應師の、み許を、お訪づねしたいと思ひましたので、別れ惜しくも了蓮寺様方を辭去し歸路についた。

列車が豊橋驛に着いたのは、眞夜中であつた。藤井先生のお家へ参るには、この驛で下車するのですが、餘り夜更けにお訪ねするのも如何かと考へましたので、ついお寄り申さずに、しまつたのですが車中つらく考へまするに、これは、とんでもないことをしてしまつた。先生のお側近く通るのに、いくら眞夜中だからといつてお伺ひ申さなかつたといふことは、何んとしても先生に申譯けないことである。況んや西福寺の中島様から頼まれたものもあつたのにと深く悔悟と愛惜の情に打たれ、残念で堪へられなかつた。車中先生に、心の中でお詫び申しながら拙詠一首。

藤井師のみ許訪はずに過ぎ去るも

かへすがへすも惜しくとぞおもふ。

○十九日

雨にも會はずに七日間の旅行は楽しく了つた。これからは一路わが家に歸へるばかりだ。歸路車中にて拙詠一首

ありがたや彌陀の光にてらされて

旅路たのしくかへるうれしさ。

南無阿彌陀佛

（終り）

（筆者は本會々員）

花まつり

高橋良和

—歌（アナウンスに前奏O・L）—

（山のお寺の花祭り 青柳興敬作詩・室崎琴月作曲）

- 一、櫻が咲いた山の上
花をくゞつてのぼりましょう
山のお寺の花まつり
- 二、お堂が見える山の上
段々数えてのぼりましょう
山のお寺の花まつり
- 三、鐘が鳴ります山の上
甘茶もらいにのぼりましょう
山のお寺の花まつり

—話—（二番の歌にO・L）

それは今から三千年も前の印度のお話です。雪をかぶつたヒマラヤの山、ゆつたりと流れるガンジス河の流れの近くにカピラバスツと言うお國がありました。

王様をスツドーダナ お妃をマーヤさまと申し上げて、大變やさしい方々でした。

王様はお年をおとりになつておられますが、この平和なお城をゆるする王子様が、まだお生れになつておられません。それが何よりの心がかかりでした。

—前奏—（しばらく聞いて）

それは涼しい日のことです。

マーヤさまは椅子にもたれてすやすやと眠つておられました。すると、どこからか大きな白い象がのそりのそりとおりてまいります。象は何物にも恐れないうお妃の近くまでどんどんやつてまいりました。

マーヤさまはおどろいて、

「誰か来ておくれ、早く誰か来ておくれ。」

と何度も聲を立て、およびになりましたが、今日に限つて誰もおりません。（少し間をあけて次の話にうつる）

—途中より歌 O・L—

（花まつり 相馬御風作詩・弘田龍太郎作曲）

- 一、天にも地にも またとない
たつた一人の 王子さま
今日は楽しい 花まつり
年に一度の 花まつり
櫻の花も 散ります
- 二、略
- 三、天にはひばり 地には花
花の御てんに 花のみち
四月八日の 花まつり
照つても降つても 花まつり
お寺の鐘も 鳴ります

マーヤさまは遂に右手をあげて白い象をはらいのけようとなさ
いました。と、そのとたん白い象はマーヤさまの右のわき腹にす
ーつとはいつてしまいました。

「まあ變な夢を見たこと。」

と椅子から身體を起こされましたが、なんだからうれしい御様子で
した。

——歌——

(音樂が終つてから)

その次の日マーヤさまはこの夢のお話を王様に申しました。

「それは、不思議なことだ。さつそく夢を占う學者を呼んでみて
もらうことにしよう。」と、言うので夢の博士をおまねきになりま
した。

「王様、私は夢の博士でございます。それはめでたい夢でござい
ます。王子様がお生れになります。それは大變立派な方で世の中
の人々を救つて下さいます。」
と申しました。

——歌——

(子供花まつり 賀來琢磨作詩・本田鐵磨作曲)

一、お花をあげましょ さゝげましょ

きようは子供の 花まつり

にこにこ元氣な お釋迦さま

みんなでお祝い いたしましょ

二、甘茶あげましょ さゝげましょ

きようは子供の 花まつり

ちらちら蓮華の 花がふる

みんなでお祝い いたしましょ

(歌にOL)

この夢の博士の言つたことはすぐ國中にひろがりました。

「王様のあとつぎが出来るのだ、めでたいことだ。よろこべよ
こべ。」

と國中は王子さまの御誕生をお待ちいたしておりました。

王様とマーヤさまは、今夜生れる王子様が立派な方であるように
心をますます美しくなさいました。

——歌終る——

それから暫くたちました。

——音樂(花咲く南の島 曾我晃也作曲)——

マーヤさまが、いよいよ王子様をおうみになる頃になりました。
マーヤさまはたくさんのお伴をつれてお國へお歸りに、

それは四月八日のことです。

ルンビニーというきれいなお庭に行列がやつて来ておやすみにな
ることになりました。あたりにはマンゴーや、ドリアンも今が盛
りで美しい鳥の聲も聞えて來ます。

マーヤさまは花咲くアフリカの木の下まで來られてなにを思われた
のか、ふと手をあげて花をとろうとなされたときにきゆうにおた
おれになりました。

——音樂終る——

おつきの人たちが驚ろいて「おきさきさま」と駆けよつてみます
とどうでしょう。可愛い「赤ちやま」がマーヤさまの身體から
「おぎやつ」とお生れになりました。

——歌——(話にOL)

(花まつり 坂野直史作詩・松濤基作曲)

一、鐘が鳴る鳴る

四月の八日

輝く赤ちやま
めでたい御誕生
甘茶わかして

おしやかさま
花まつり
お祝いしましょう

二、日の出きらきら

明るい朝だ

光りのお姿
めでたいお誕生
花の御堂で

お釋迦さま
花まつり
おまつりしましょう

三、風はそよそよ

霞もなびく

霞のまんなか
めでたいお誕生
お手々つないで

お釋迦さま
花まつり
お祝いしましょう

四、花もふるふる

四月の八日

やさしいのゝさま
めでたいお誕生
花をさゝげて

お釋迦さま
花まつり
お祭りしましょう

「まあ王子様！」

おつきの人たちは驚いてきゝました。元氣のよい丸々と太つた王子様です。ふしぎなことがあるものです。

この王子様の御誕生に大空から七色の光がさんさんとふりそゝぎました。

そればかりではありません。見たこともない四天王が馬に乗り金銀のまばゆい甲冑をきて

「さあみんな安心するがよい佛が生れられた。今までの悩みは晴れるよ、教をおきき、そして世界に平和が来たよ。」

と、歌いながら花をふらし、いゝ匂の水を大空からふりそゝいで王子様の身體を清めました。

——歌——

すぐさまお城へ使いが出されました。

王様のスツドードナさまはどんなによろこばれたことでしょう。そしてこの王子様の名前をシツダルタとおつけになりました。何とかして立派な人になるようにとお祈りになりました。

——歌（音楽）終る——

或日のことアシタと言う仙人がお城にやつてまいりました。王様はアシタ仙人に

「シツダルタは大きくなればどんな人になるのか。」と、おたずねになりますと、

——音楽（歌の前奏）始まる——

仙人は涙をボロボロこぼしながら

「王様心配なさなくてもよろしゅうございます。」

世界中にこんな立派な心と身體をもつたお方はございません今に世界を導く光とおなりになります。私はその頃迄生きておられないのがかなしくて、かなしくて。」と申しました。

——歌——（全部聞かせる）

（花まつり子供の歌 立野勇作詩・海澤實作曲）

一、よろこびの花が咲きます匂います

甘茶うれしいお釋迦さま
櫻ちらちら 櫻ちらちら花まつり

三、よろこびの鐘が鳴ります響きます

光うれしいお釋迦さま
櫻ちらちら 櫻ちらちら花まつり

王様はこの言葉を聞くと、安心なさいましたが、この世界を導く光。

——音楽（歌）始まる——

それはシツダルタが大きくなつて長い旅行と勉強に一生懸命はげんで、ついに有難い佛の教を世界中の人々に示して「おしやかさま」となつたときにはじめて世界に平和の春がやつて來ました。

——歌つゞく——

(花まつり行進曲 赤尾白嶺作詩・成瀬信治作曲・弘田龍太郎編曲)

一、略

二、立派な國に

富も位も

一人お城を

六年にあまる

生れ出て
ありながら
ぬけ出して
御苦行

三、廣い世界の

教の門を

かわける人に

甘露の水は

まん中で
うちひらき
ふりまいた
限りなし

四、何年たつても

咲いたまゝなる

きれいな一つを

われらも負けずに勵ましよう

かわらずに
法の花

(歌の四番頃よりO・L)

おしやかさまの教は印度から中華民國へ、そして日本へそれから世界の國々にひろまつて三千年もの間にいたる所で美しい花を咲かせて人々のくらしの上に明るい光を投げております。

——鐘の音——。(余韻にO・Lして)

花まつりは

——歌始まる——

このお釋迦さまのお誕生を祝うおまつりで、明日の八日は日本中どこでもにぎやかな花まつりが開かれます。

——歌(高潮して)——

(花まつり 西條八十作詩・本多鐵磨作曲)

一、春の野の うるわしき 花々を

F.F.D幻燈機

映寫機(ふつうの映寫機と略同じ性能)

ミナシキ12880圓送 500圓

マスター13500圓送 500圓

スライド(フィルム)

各巻 3~500圓程度、數百種、

一報カタログ進呈

本會代理責任取次(會員には一割引サービス)

二、

清きおもいに 集めきて
み佛に さゝげそなうる
たのし たのし きようのまつり

かぎりなき み佛の おん慈悲に
花はかおりて やすらぎは
天地にあふれ輝く

たのし たのし きようのまつり

三、

雨風をしのびつゝ 花は咲く
ふかき感謝と 信仰ぞ
ひのもとを照らす あけぼの

たのし たのし

きようのまつり

釋尊物語

(一)

文學博士 山 崎 宏

一、出家以前の釋迦

——シッタルタ太子の誕生——

インドの西北、世界で一番高いヒマラヤ山脈の南のふもとには、ひろびろとした景色のよい平野が、開けていた。そこには、今から二千四・五百年も前のこと、釋迦族とよばれる民族が、小ぎれいなカピラという城を築いて、住んでいた。カピラ城から北の方には、眞夏にも白い雪をいただくヒマラヤ連峰が、天氣のよい日には朝夕とも神々しい姿をあらわし、お城のあたりには、四季おりおりに、美しい花が咲き、きれいな鳥のさえずる林の中には、何時も甘い果物の香が、ただよつていた。

それに、カピラ城主のスッドダナ王は立派な方で、淨飯王ともいわれ、人民にしたわれていたので、國內は平和の日を楽しんでいた。ただ王が四十五歳にもなつて、まだその夫人マヤとの間に一人も子供がなかつたのは、何よりもさびしく、また釋迦族のなやみの

種でもあつた。

ところが、初夏のさわやかなある日、マヤ夫人は、かがやくばかり眞白な象が、寢臺のまわりを右に三度めぐつてから、自分のお腹の中に入つた夢をみられた。インドでは古くから象を尊んだので、何かよいことでもあらうかと思い、淨飯王に話して有名な占師のアシダにたずねた。アシダはこれを聞いて、

「すばらしい夢だ。確かに王子様が生れる。そしてその王子は全世界の聖王となるか、さとりをひらいて佛様となり、すべてのものを救うか、どちらかでしょう。」

と判断した。この時、空中から音楽がひびき四方よりれんげの花の雨がふり、めくらは目があき、つんぼも聞え、おしは話をし、いざりは歩き出したと、お經の中に世間のよろこんだ有様をつたえている。

これから十月たつて、マヤ夫人はお産のために、自分の生れた實家にかえることになつた。カピラ城を出て東北の方、五キロほどの

ルンビニ園で休まれ、折から咲きはこる無憂樹の花が、あまり美しかったので、マヤ夫人がそれを折り取ろうとされた時、急に王子様が生れた。これがすなわち釋迦の誕生で、それは普通四月八日の花まつりの日とされているが、釋迦とはもと民族の名で、その姓はゴータマ、本名はシッダールタといわれている。

——少年時代——

人の世は、はかないものである。カピラ城門では、久しぶりに立派な太子様が生れたよろこびに、ひたつている間もなく、太子が生まれて七日目とゆうのに、母親のマヤ夫人がこの世を去られた。太子はまだ何も知らなかつたろうが、父王の悲しみは深かつた。だが幸いにも、マヤ夫人の妹マハーパチャバイは、やさしい人であつた。それで姉のあとをついで、淨飯王の夫人となり、釋迦すなわちシッダルタ太子の母として、おさない太子の世話をひきうけ、一生けんめいに育てたので、太子は大へん元氣に成長された。

シッダルタ太子は、まことに不思議の子であつた。生れた時から可愛らしいふつくらしした顔の中に、何となく神々しいものがあり、不思議に人びとは、おがみたい氣持に打たれた。だんだん成長して少年時代になると、いよいよ世界無比の優れた性質を現わして行つた。殊にその賢いことは、恐ろしいほどであつた。朝は早く起き、自分のなすべきことは、少しも召使などにやらせることはなかつ

た。それが實に正確で、少しも缺けたところがなかつた上に、何事にも熱心で、最後までやりとげなければ、止めなかつた。それでいて、じまんするどころか、誰にも優しく、何事についても感謝し、本當に正直で、なさけ深かつた。

淨飯王は、日々成長する太子の美しい性質が頼もしかつた。それで、國中のすぐれた學者や、武藝の先生などを選び、太子に教えさせることにした。時に學問の師として選ばれたのは、名高いイシュバミットラ博士であつたが、太子はもうこの頃、六十四種の教を暗記していたので、博士に向い

「先生は、いま何をこの私に、教えようとするのか」と、正面から問われた。これにはさすがの大博士もたじたじになつたという。

太子が學問に、ばかり熱心になつていたので、父王は少し心配になつた。そこで一日、太子のために、武藝大會を開き、その妙技を試めされることになつた。太子は、あらゆる武術を心得ておられるという評判であつたが、ことに弓術には神技をもつていたらしい。はたして當日も、太子は電光の如く矢を飛ばし、或は一本の毛に見事に射當て、それから目がくしをして、音によつて太鼓を射當てることなど、種々様々の弓術の妙技をふるい、城中の人ほとより、父王をも大いに感嘆させたという話が、傳えられている。

このように、シッダルタ太子が、學問や武藝に、ならびない天才



をもつておられたことと共に、太子がどこまでも、あわれみ深く、それが人間にだけでなく、すべての生物に、廣くなさを及ぼされたことは、大いに注意しなければならない。太子の小さい時から、あわれみ深かつた話は、いくつも残っているが、そうした心は、年と共に強くなつて、だんだん物思いにふけられることが多かつた。

太子が十二歳の頃のある初夏の一日、太子は父王と共に、多くのお伴をつれて、郊外に農事を見に行かれた。初め太子も心楽しく、さわやかな朝風に吹かれながら、田舎の景色に見とれていたが、やがて太陽が高く上つて、熱い光がキラキラと照り出すと、太子の目に裸で汗を流しながら、くわを振っている農夫や、むちを打たれてあえぎあえぎ歩く牛などが映つて來た。さらに、よく見ると、掘り

起された土から、虫けらがあわてて逃げまわり、それを小鳥が、はげしく争いながら、せつせと食べていた。こんなことは、どこの田畑にもあることで、あたり前のように思われるが、清らかな汚れないシッダルタ太子の目には、何時までも、かなしいあわれな姿となつて、まぶたに残された。

「かわいそうだ。どうすれば、皆をすくえるだろうか。」

お伴の人が遠くに去つたあとも、少年シッダルタは眞剣に考えこんだ。何時の間にか太子は、田のそばの一本の大きな木の下で、兩足をくんで靜かに坐り、目を閉じて心をととのえた。時は刻々とたつて、木々の影はだんだん動いて行つた。しかしこの時、太子の上の木影だけは、いつまでも、まるく太子の上を、おおつて動かなかつた。そして父王や役人たちが、一通り田畑を見廻つて、歸つて來た時もなお、太子は大木のまるい影の下に、靜かに坐つていた。人々は餘りに尊い太子の姿に、思わずひざまずき、父王もわが子ながら自然と手を合せて禮拜したとゆう。

——結婚と四門出遊——

初夏の農桑視察以來、淨飯王は何んとなく、太子の將來が心配になつた。底知れぬ深いふちのような太子の心は清らかに澄んではいたが、さみしく、また何んとなく恐ろしかつた。そして時々、ふかく思い込まれるようなことが、多くなつていつた。

太子は、父王がそれとなく氣づかっていることを、もとより知つていた。それで時々、いとこたちと、無邪氣に遊んだりして、父王を安心させることに努めた。こうして太子が、ようやく成人するにつれて、父王は早くよき妻を迎え、自分のあとをつがせ、人民から良い王様としたわれるようにと、そればかり毎日祈つた。

そこで淨飯王は、あれこれと國中のよい娘さんを、たずね廻つたあげく、血統の正しい、禮儀のあつて、立派な家からの娘ヤシヨダラーがよかろうと決心した。時に太子は十九歳であつたが、當時のインドの習慣として、もう結婚するのが普通であつたので、妃としてヤシヨダラー姫を迎えた。花のように美しく優しい姫は、容止端正な若きシッダルタ太子にとつて、誠にふさわしい妃であつた。夏の御殿も、冬の御殿も、それにインドのはげしい雨季に住む御殿もみんな新しく造られた。どの御殿にあつても、お二人は春の花園にたわむれる蝶々のように、うるわしく幸福そうに見えた。ことに四季折々の月の宴、花の宴などには、美しい舞姫の踊や、おいしい御馳走など、つきぬ楽しみが、くりひろげられた。

もとより太子は、こうした間に、父王の心ずくし、妃の愛情に對して感謝した。しかし太子の心は、どこまでも眞理を求め、そして世の人びとの苦しみを救い度い、という念願に燃えて行つた。ヤシヨダラー姫は、日毎に物思いに沈む太子の身の上を、誰よりも深く心配され、しきりに太子の氣晴しに努めた。しかし、あたりの寢靜

まつた眞夜中、そつと起きて坐り、じつと考え込まれている太子の姿は、何か知ら侵しがたい神々しいものに見えた。

シッダルタ太子は、何事についても、中途半ばでごまかして行くようなことは、されない性質であつたが、人びとが餘り心配するの で、つい氣晴しのために、ある日、城外に遊びに出ようと、いい出された。父王も、これで少しでも、太子の氣がまぎれるかも知れないと、大さんせいでお許しになつた。そこで太子は、お伴をつれていよいよ愛馬カンタカにまたがり、東の城門を出られた。ところがあいにく、城門を出るとすぐに、しわだらけのよぼよぼの老人に會つた。白髪頭で、はの缺けた口もとから、よだれが流れ、力がつきで、大小便をたれ流した上に、ねている始末である。いつも若い美しい人たちに、かこまれていた太子は、あわれな情ないこの老人の姿を、特別かわいそうに思われた。助ける人もないこの老人は、もう直ぐに息がたえて、死んで行くのであらう。いやこの老人だけのことでない。どんな若い人でも、みんな人間は、こうしてふるえながら、息を引きとるのだ。ここまで考えると、太子は遊びどころではなく、黙々と馬をかえして、一日中ただ考えこんでしまつた。けれども、それから少したつと、太子は思い直して、今度は南の門より出かけることにした。父王は、また變なものに出會つてはこまると考えて、通路の番人をまし、よく掃除するように命ぜられた。それににもかかわらず、またしても氣のどくな病人に會つた。こ

こで行列はどうしても進まず、引返した。次いで三度目に、西の城門より出遊された時も、またまた死者に出會つて、太子はいよいよ心が樂まずして歸つた。それでもあきらめず、最後に北の門から出られた時は、ゆうゆうと歩く出家人の姿が、太子の目にとまつた。太子はここで、かれが世間のわずらいをさけて、自由人となるために、専心修業していることを聞き、まず自からの惱をとく、唯一つの方法として、出家することを志すようになったとゆう。

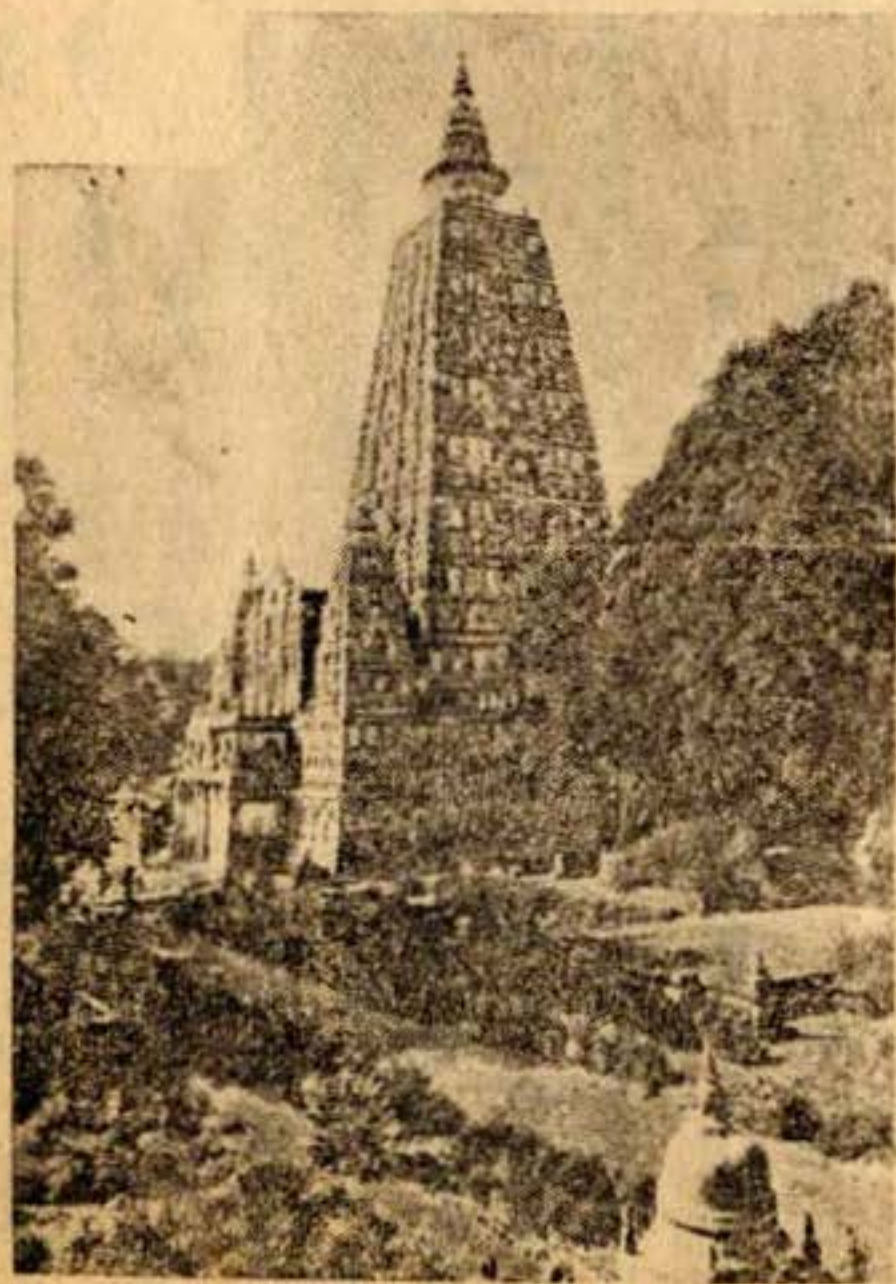
二、釋迦の出家と當時の インド社會

——シツタルタ太子の出家——

シツタルタ太子は、人生のなやみを解くために、出家を志したが一國の太子の身で、出家するということは、容易なわざではない。太子は長男のラーゴラーが生れると、いよいよ後つぎが出來たので出家を決心し、ヤシヨダラー妃に、それとなく話をしたが、むろんわかつてくれる筈もなく、なやみ續けた末に、父王に相談したが、これまた許されず、これより城門の警戒が、嚴重になるという有様になつた。

そこで太子も、今は何とか脱走するより外に、方法はないと心を固めた。だがよい機會は、なかなか來なかつた。けれども、ぐず

ぐずしていられない。ある夜、太子はわざと氣げんよく、舞姬たちの踊などを見て、ゆ快そうに笑い、一同を安心させ、寢室に入つて床につかれた。今夜こそ、と太子の心は、すでにきまつていたのである。人びとが寢靜まると、太子はそつと起きて用意した。廊下に出て、しのび足に妃と愛兒の寢室の前に立ち、よそながら別れをつけて、靜かに去られた。廣い御殿のいく室かを通りぬけて行くと、中には前ほどまで美しく化粧して踊つていた舞姬たちが、暑さのためにながしく、手足をほうり出し、體をまげ、よだれを流し、いびきをかきながら、だらしなく眠つて入つた。太子にはそれが實になさけない人間の正體を、むき出しにした姿に見え、早



くこのあさましい世間から、のがれようと急ぎ足に、馭車のチャンナナの所に行つた。

「チャンナよ、愛馬カンタカに、くらをおいて連れてまいれ。」と太子は、おごそかにいつた。チャンナは太子が唯一人で、眞夜中にお出かけと聞いて、びつくりした。かれは心をつくして、色いろと思ひ止まるように願つたが、太子のはげしい氣力におされて、どうしようもなく、カンタカをひいて來た。太子は靜かにカンタカの首をなでて、ささやいた。カンタカは首をたれて、いなくなつた。しなかつた。

重い城門は、不思議に音もなく開き、夜半のカピラ城外には人影がなかつた。暗い夜道に、全身純白なカンタカの姿が、くつきりと浮んだ。そしてそれも、輕やかな蹄のひびきと共に、またたく間に消え去つた。しばらくして、東の空がうす赤く染まる頃、アノーマ河のほとりに、さわやかな朝風に吹かれながら、主従二人と一匹の白馬とが立つていた。人も馬も、ここまでは無言であつた。太子はここで、美しい着物と冠をぬぎ、チャンナに渡し、カンタカをつれて宮城にかえり、父母及び家中に報告せよといつた。

僧衣に着かえ、すつかり變られた太子を見つめるチャンナの目からは、止めどもなく涙があふれた。かれは一心に、どこまでも太子のお伴をし度いと願つた。カンタカも、そこにひざまずき、水を見ても飲まず、草があつても食べようとしなかつた。太子は靜かに

何時かは、生死別離の來ることを説いた。チャンナは泣きながら、馬のくつわをとつて立ち上つた。

「くれぐれも、どうぞ太子様、お大切に」

力なくひき返したチャンナは、いく度もふり返つて手をふつた。太子は白馬カンタカの悲しげないなきが、遠くに消え去るのを聞き終つて、自分の手で、ふさふさとした髪をたち切つた。朝まだき、アノーマ河原に立つた二十九歳の太子の姿は、もう立派な出家の姿であつた。(つづく)

(東京教育大學教授)

五月號 豫告 五月中旬發行

救ひなき悲しみ

吉田絃二郎

父の童話

幸田 文

保育會の問題と佛教徒の自覺

内山 憲尙

小消息講義

佐藤 賢順

釋尊物語

山 崎 宏

集團出家

鶴田 湛泉

ラジオドラマ落日 (觀經)

須藤 出徳

愚鈍念佛に生きて

田中 林助

劇物語熊谷入道

梅津 和夫

五月の節句

新しい寺の行き方(3)

百田 師惠

芝園だより

○春陽のうらうらと輝く季節。一年の中で、後記の一番書き易い季節。何故なら、春は永い間待ちつゞけられ、心の中に、ありのままに書きつくされているからである。

○花の季節。萌え出でよ。咲き出でよ。そして生れ出でよ。何とすべてが生々と輝いていることか。本誌も二十の春を迎えました。幼児の稚拙を脱けて、青年の躍動の段階です。

○昨今、宗門出の文學者の進出が目ざましい。藝術と宗教。文學と佛教。無條件に二つを結びつけることは、無責任すぎるかも知れないが。武田泰諱氏にしても丹羽文雄氏にしても、今日あるその才能と努力とに對しては、宗門の側からの厚い謝意が表せられるべきであると同時に、二つのものの結びつきを此等の人々に希望すべきであらう。(竹中)

○寒い寒いと思つて居たのに花まつりが来るともうすつかり春です。行樂の人々が野や山に一杯になることでしょうか。「あしたに開く榮華は夕の風に散りやすく」との法語を忘れない様にしたいものです。

○それにしても、ビギニまぐろとかで、思わぬ水素爆弾禍をうけたわれわれは、何と悲しい存在でしょう。偶然の出来事の様ですが、餘りにも卑肉です。小さな島でワイワイ騒いでいることが、何かおかしい様でもあります。

○花まつりにちなんで、山崎宏博士の釋尊物語を、しばらく連載させて頂きます。先生は東洋史の研究を進めて居られますが、特に歴史學者としての立場から、易しく釋尊傳をお書き下さいました。御精讀下さい。

○NHKの四月七日放送で竹中先生が「生れ出するもの」と言う題で全國放送されます。尙先生の幼稚園の子供さんの歌も出ます。花まつり特輯番組として、本誌が提供したもので、放送劇觀無量壽經も、又その一つです。

○大島泰信先生七回忌で三佐藤竹

中氏小生が目黒の長泉院にて、遇合。武田泰諱先生の意氣ケンコウたるところを見せられて来ました。

○大澤土宗成立の日も近いとか申外の高橋良和氏も、この所東奔西走。東京では、編輯子と談合の機を得ました。(安居)

○芝公園の新緑が目にも鮮やかだ不安の世に生きるものには、むしろ櫻花の満開は淋しい。

○敎學院研究紀要「佛教論叢」第三號が三月に出版された。主幹松濤教授の努力もさりながら、こうした地味な方面に一宗の努力が凝つて出て来たのはうれしい。主として昨秋の大會に於ける全宗宗學者の發表を収めている。A五版94頁。

○大正大學本年度入學者は約百八十余名、志願者は昨年度より二割増。

○京都の戸川靈俊氏來訪、宗會で上京、青年層の意を述べらる。本誌や大正の同窓會について、京で大にお世話願つてゐる。

○特に最近本誌を委託施本する方が増えて来ました。一ヶ年分の會費と宛先をお送り願ひ直接本會から月々本誌を送るといふやり方です。皆様の御利用をおすゝめ致します。

○皆様の投稿をお待ちします。なるべく原稿用紙で。原稿は一切返却せず、取捨は編輯部に御一任下さること。採用決定して活字となるのは早くて一月後ですから、お含みおき願ひます。

○父は昨年来の疲れでしばらく憩をとつておりましたが、そのうち誌上へ出て頑張ると云つております。(龍海)

誌代 會費半ヶ年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿九年三月廿五日印刷
昭和廿九年四月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京千代田區神田保町二丁目
電話・三(四三) 一三二八

御袈裟法衣御調進

○錦金襴

○特種織物

○御水引

○御打敷

○御幡

○稚兒衣裳

御法要に梵鐘供養に新装の稚
兒貸衣裳を精々御下命の程を

増上寺
宗務所
大正大學
芝中學校
淑徳學園

御用達

東京都港区西久保巴町一〇六

野村法衣店

電話芝(43)〇四二八番
振替東京七八九四五番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一週一日發行)
昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日發行

第二十卷

四月號

幼稚園運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松管
・光明・芝等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(05)1024(池上驛東3分)

鐵ブランコ2人乗	¥ 12,000
鐵ブランコ3人乗	¥ 14,000
鐵ブランコ4人乗	¥ 22,000
鐵ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000
此他各種、一報力タログ送	

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は九通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付

定價金三拾圓(送料別)